

CINEX Web Journal



第 4 号

発行日 2018 年 4 月 1 日

- | | |
|-----------------------------|-------|
| ★ Life-changing experience | 金子 次好 |
| ★ プログラミング教育必修化にあたって | 鈴木 俊雄 |
| ★ ICT に課せられた文化的インタフェース構築の意義 | 前野 博 |

Life-changing experience

静岡県立磐田南高等学校 金子次好

勤務校で、アメリカにある姉妹校との交流の仕事を担当して 10 年になります。静岡県磐田市が、アメリカのカリフォルニア州にある Mountain View 市と 1976 年に姉妹都市提携を結んでいた縁から、1992 年に勤務校の創立 70 周年記念事業として、現地の Mountain

View High School と姉妹校になり、それ以来 1 年おきに両校から 25 名の生徒が、お互いの学校を数日間訪問しています。Mountain View 市は、Google の本社があるシリコンバレーの中心地です。

数年前に来日した Mountain View High School の生徒たちに、日本での研修旅行について感想を書いてももらった際に、具体的な内容は記載されていませんでしたが、数名の生徒が、「この旅行の中で”life-changing experience”をした。」という趣旨のことを書いていました。最初は大げさな表現だと思いましたが、これは初めて日本の文化に触れたアメリカ人高校生の素直な感想かもしれません。研修旅行は磐田市に来る前に、広島と京都を訪れます。磐田市に滞在する間は、生徒たちはホスト生之家にホームステイをします。アメリカ人高校生に、日本の観光地で印象深い出来事があったかもしれませんし、日本人の家庭で数日間日本人の生活を体験する際に、新たな発見や驚きがあっても不思議ではありません。今考えると、その生徒たちにとって何が”life-changing experience”だったのか、詳しく聞いてみればよかったと思っています。

最近では e-mail や SNS などを利用して、訪問前にホスト生と何度も連絡を取り合っている者もいます。インターネットで訪問先の様々な情報も簡単に入手できます。しかし、いくら情報を事前に容易に入手できるようになっても、一人の人間が異文化に実際に触れれば、自国の文化との様々な違いに驚いたり、戸惑いを感じたり、新たな発見をしたりすることが何かしらあるのではないのでしょうか。姉妹校との交流は、事前の準備等かなり大変な仕事ですが、これからも両校の交流に関わった生徒たちが、良い意味での”life-changing experience”をできるよう、お手伝いできればと思っています。

プログラミング教育必修化にあたって

ビップシステムズ株式会社 鈴木俊雄

私が IT 業界に入って約 10 年が経ちました。日進月歩の IT 技術に日々苦勞しつつも、中堅の技術者としてシステム開発の現場で汗する日々を送っております。

昨今、ニュースでは IoT(Internet of the things)や AI(人工知能)といった IT 技術に関連した報道が盛んになっています。実際に保険コンサルティング業務に AI を利用する(※1)、

IoT 機器を利用した農業経営(※2)といったように、これまで IT 技術と関連が薄いと考えられていた分野でも積極的に IT 技術が取り入れられてく傾向にあります。

こうした IT 技術の盛り上がりと同時に顕在化してきた問題として、国内の IT 技術者の不足があります。経済産業省が 2017 年に発表したデータによれば、現在国内では約 17.1 万人の技術者が不足している(※3)とのことで、実際 IT 業界の現場においても「仕事はあるが、人がいない…」といった声を耳にすることが多くなりました。また、先に述べたように IT 技術が取り入れられる分野が増加すること、産業人工が減少することを加味して考えると、今後こうした傾向は加速していく可能性が高いと言えるでしょう。

2020 年から日本ではプログラミングが小学校の授業として取り入れられることが決定しています。無論こうした授業内容がイコール IT 技術者の養成ではないと思いますが、幼いころからプログラミングに触れることで、将来職業として IT 技術者を選んでいただける方が増えることを、IT 業界の一員として強く望みます。

※1 「生保の新米営業、AI 活用でベテラン級に」(<https://newswitch.jp/p/11736>)

※2 「農業 IoT の取り組み (山梨市ぶどう農園)」

(https://flets.com/iot/case/?banner_id=h_gkt_ngi_pc)

※3 「27 年度調査研究レポート」

(http://www.meti.go.jp/policy/it_policy/jinzai/27FY_report.html)

ICT に課せられた文化的インタフェース構築の意義

至学館大学 前野博

巷間伝によれば「愛に国境はない」「音楽に国境はない」という。昨今は国際的な情勢もあり地政学的観点から語られることの多い国境ではあるが、文化、言語、風俗等、人は様々に線を引く。音楽におけるそのような線引きは、世界が技術的に狭小となった現在、楽曲の民族性も様々に混淆し、ジャンルを問わず、まさしくボーダレスに視聴されている。しかし、ジャンルを問わずという意味の捉え方には注意が必要である。例えばモーツァルトからレディ・ガガ、ヒップホップから演歌と広く愛聴するにしても、その多くはある共

通ルールの支配下にある。即ち、7音より構成された西洋の伝統的音階と和声理論である。

一方、インドのシュルティのような微分音を含む 22 音からなる音階もあり、世界には欧米文化圏より遥かに多種多様な音律と音階に基づく音楽が溢れている。これらを耳にする機会は少なくないし、興味を持って聴くこともあろう。しかし、興味を持つことと理解すること、さらに感動することは必ずしも同一ではない。音楽はただ聴いて楽しめば良いという考え方に全く異存はないが、楽曲を理解し、感動を得るためにはある種のスキルが必要になることもある。ましてや音律も未知であった場合、理解はより困難となる。このように、音楽理解における国境の壁は意外に高い。

ところで、近代より音楽に視覚情報を関連付けて理解を促す試みが為されてきた。ウォルト・ディズニーの『ファンタジア』（1940）のように映像と音楽を主客逆転させた実験的な例もある。音楽演奏においても例えば、手軽でしかも直感的な表現手段を用いた映像という共感アイコンの即時付加等ができるようになるならば、音楽理解における国境の壁を低くすることへと繋がるかも知れない。テキストにスタンプという感情アイコンを付加したコミュニケーション形式が一般化し、新たな共感手段が老若男女の別なく普及したように。

音楽も言語も人と人を繋ぐインタフェースとして捉えるならば、既存のメディアに囚われずに新たな表現方法を生み出すことで人と人を繋ぎ、より活性化し、高機能化することも ICT に課せられた重要な役割なのである。